

HELLO PSJ

「ケンブリッジ大学より」

ケンブリッジ大学解剖学研究員 筒井健一郎

「あー、フィッシュアンドチップスが食べたい。」
久しぶりの里帰りの後、ヒースロー空港に降り立ったとき、こうつぶやいていることに気が付いて、自分もかなりイギリス生活に慣れたのかもしれない、と感慨を覚えました。2002年4月より、ケンブリッジ大学解剖学のShultz研究室のポスドクになって以来、早くも10ヶ月が経ちました。ケンブリッジに来て間もない頃は、イギリスの料理にはかなり参っていました。味にこだわる関西人を自認する私としては、とても悲しい毎日でした。ただでさえバリエーションの少ないイギリス料理ですが、狂牛病を警戒して牛肉を避けているせいで、ほとんど毎日、白身魚とポテトのフライと野菜のボイルを食べていました。不思議なことに、その料理には味が無いのです。白身魚にはたっぷり衣がついていますが、ソースなどはかかっていません。フライドポテトも、野菜のボイルも、ほのかな匂いがするだけで、なんの味もしません。前菜のスープ、たいていはマッシュルームかトマトのスープですが、それも、しかりです。イギリスに来るまで、食卓に備え付けてある塩と胡椒は一種の飾りだと思っていましたが、こちらでは必需品であることを知りました。さらにその上、モルトビネガーをかけるという技があることも学びました。それでもやはり、塩や酢をしこたまかけても、何か物足りないのです。私はその、なんとなく締まりのない、なにかが足りない料理を口にしながら、数ヶ月考えていましたが、突然重要な事実気が付きました。イギリス料理には、うまみがない。材料をただ揚げるか、ゆがくだけで、決して出汁をとることが無いのです。

料理の話はさておき、大学の事をお話したいし

ます。ケンブリッジ大学は、多数の学科 (department) と学寮 (college) の集合体です。このような構成をとっている大学は、おそらく世界でもケンブリッジとオックスフォードだけだと思います。学科は、学問領域ごとに設置され、それぞれの学科には学科長 (professor) を筆頭に多数の講師 (lecturer) とポスドクがいて研究を行っており、世界の大学と同様の組織構成だと言えます。それに対して、学寮は、学生の生活および教育の場で、数学から文学まであらゆる分野の教師 (fellow) が教育を担当します。ケンブリッジ大学に学生として入学すると、多数ある学寮のいずれかに所属し、4, 5人の贅沢な小人数クラスであらゆる分野を習います。大学院に入ると、学寮を出て本格的に学科に所属して研究を行います。学位をとって、ポスドクで業績をあげるか、講師になると、どこかの学寮の教師を兼務し、再び学寮に住み込むか、あるいはその近くに家を構えて、学科で研究を行うとともに学寮で教育を行います。私は外国人のポスドクとして解剖学科に所属しています。イギリス人と新しく知り合ってケンブリッジ大学に勤めていると言うと、「どこの学寮だ？」と聞かれますが、「学寮には所属してなくて、解剖学科で研究をしている」、と答えると、たいてい気の毒そうな顔をされます。どうやら、世間では、学科の研究者より学寮の教師の方が、聞こえがいいようです。

ここで、ようやく本題に入りますが、私は解剖学のSchultz研究室に所属し、ボスのWolfram Schultzと、数名のポスドク、コンピュータプログラマとともに研究をしています。ボスはドイツ人、教室員は、イギリス人、アメリカ人、スイス



Wolfram Schultz 邸でのバーベキューパーティー
右端が Wolfram, Gerda 夫妻, 左端が私と妻

人、ハンガリー人、ポルトガル人、日本人と、多国籍のチームです。Wolfram（イギリス人はたいいどんなに地位や年齢の高い人でもファーストネームで呼んでいます。彼の母国のドイツでは、そうではないらしいのですが、郷に入っては郷に従えなのか、我々のグループでもボスをファーストネームで呼んでいますので、ここでもそう書きます）は、単一ニューロン活動の記録で、ドーパミンニューロンの機能の研究を行い、大きな成果をあげてこられました。Wolfram は、大脳皮質の研究にも手を広げる新しいプロジェクトを始めたところで、前頭葉で単一ニューロン活動の記録をやりたいと言ってきた私を、快くポストドクとして受け入れてくれました。昨年4月以来、研究室やパブで議論を繰り返し、実験の計画を練り、現在は、ニューロン活動記録実験の準備として、動物を訓練しているところです。近頃は、朝の9時から5時まで動物を訓練し、5時からパブに繰り出すか、そうでなければ論文を読んだり書いたりして、大変落ち着いた毎日を過ごしています。

ケンブリッジ大学は、歴史上数多くの重要な研究者を輩出しており、その中には、Adrian,

Hodgkin, Huxley ら神経生理学の大家も含まれています。ケンブリッジは、そこにいる人にとって、たいへん魅力のある大学であり、研究者の能力を最大限に引き出す環境なのだと思います。その理由は色々あると思われませんが、私は、特に重要な秘密の一つが、ケンブリッジの日常生活の単調さにあるのではないかと考えるようになりました。ケンブリッジ独特の生活のリズムが、何とも言えないリラックスしたムードを生んでいるように思えます。毎食、毎食、予想通りのものが出てきて、まずくもなく、とびきりおいしくもなく、栄養がたっぷりとれて、おなかが一杯になるので、料理そのものに興味が向きません。また、物価が恐ろしく高く、購買意欲が全くわからないので、買い物に行くこともほとんどありません。このように、おのずと、食べること、消費することに対して、情熱が無くなりました。しかし、その代わりに、ケム（Cam）川の土手の草木に季節の移ろいを見たり、パブでビールを飲みながらおしゃべりをしたりするのが、大きな喜びとなりました。週末には、仲間とバーベキューをしたり、ケム川でパンティング（棒で川底を突いて進むボート）をし



ケム (Cam) 川. パンティング, 散歩をする人たち

たり, 植物園を散歩したりするのが, 楽しみになりました. そしてなによりも, 研究活動が, 生活の中で, 一番エキサイティングでスリリングな出来事になりました. 学寮に住んで研究生生活を送っ

ていたら, 結婚するのも忘れて, いつの間にか老人になっていた, という人も少なくないらしいですが, そのような人の気持ちも, 少しはわかるような気がします.